

国際交流基金助成事業報告書

薬学研究科
薬学専攻 博士課程
4 年次 K.H

1. はじめに

このたび、国際交流基金の助成を受け、2026 年 7 月 12 日から 17 日までオーストラリアのメルボルンで開催された「20th World Congress of Basic and Clinical Pharmacology 2026 (WCP2026)」に参加した。本学会は、世界各国の研究者が集い、基礎薬理学から臨床薬理学まで幅広い分野の最新研究を発表・討論する国際学会である。炎症や創薬など、私の研究分野と密接に関連するセッションが多数開催され、最先端の研究成果に触れることのできる貴重な機会となった。

今回私は、Function of prostaglandin D₂ in the regulation of caerulein-induced pancreatitis in mice の演題で研究成果を発表するとともに、海外研究者の討論や講演を通じて、新たな知見や研究の方向性について多くの考えを得ることができた。

2. 学会参加に関して

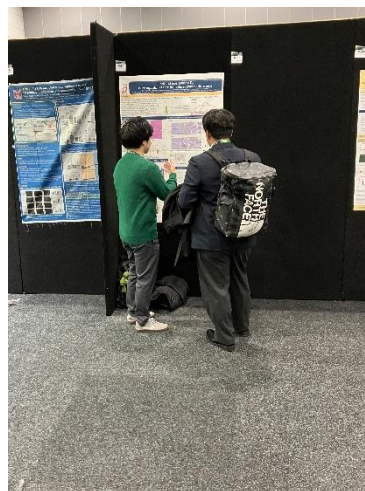
学会期間中は、炎症の研究に関するセッションを中心に聴講した。炎症性疾患における免疫細胞間の相互作用や炎症制御機構など、創薬発展につながる多岐にわたる最新成果が紹介されていた。また、特に印象的であったのは、AI を活用した薬学教育の発展に関する発表であった。AI を教育に効果的に取り入れることで、学習者一人ひとりに応じた教育や実践的な学習支援が可能となり、薬学教育の新たな可能性が示されていた。AI を活用した最先端の教育が実践されていることを実感し、今後の教育の在り方について多くの示唆を得ることができた。

本学会では、多くの海外研究者と交流する機会があり、研究内容だけでなく、それぞれの研究手法や考え方についても意見交換が行われていた。研究テーマが異なっても、炎症や免疫を共通のキーワードとして活発な議論が行われ、異分野の視点から研究を捉えることの重要性を実感した。その中で印象的だったのは、研究成果だけでなく、「なぜその実験を行うのか」「その結果をどのように次の研究へつなげるのか」という研究デザインについて積極的に議論が交わされていた点である。研究の背景や臨床応用まで含めて議論する姿

勢は大変刺激を受けた。専門用語だけでなく、研究の意義や新規性を簡潔かつ論理的に説明することの重要性を改めて認識した。



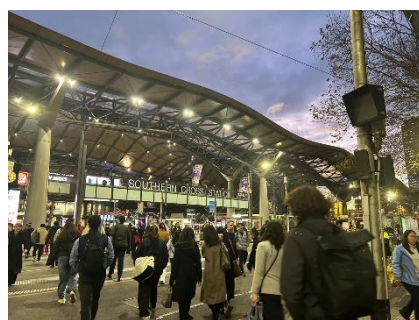
学会会場にいたカンガルー



発表の様子

3. メルボルンに関して

日本は真夏の季節であり、学会が開催されたメルボルンは、日本と真逆の真冬であった。また、メルボルンは、多様な文化が共存する国際都市であった。学会会場だけでなく、市内を散策したところ、世界各国の飲食店が並び、多様なバックグラウンドを持つ人々が自然に交流している様子が印象的であった。



メルボルンの街並み

4. 最後に

今回の国際交流基金によるご支援により、このような貴重な経験を得ることができた。今回得られた知識や経験を今後の研究活動へ還元するとともに、日本から国際的に研究成果を発信できる研究者としてさらに研鑽を積んでいきたい。

最後に、本学会への参加にあたり、ご支援を賜りました国際交流基金および多くの方々に心より御礼申し上げます。